

## 川越城中ノ門堀跡

—旧城内に残る唯一の堀跡を整備—

### 中ノ門堀の歴史と整備の概要

江戸時代、川越城は、江戸の北の守りとして重要視され、寛永 16 年（1639）に藩主となった松平信綱は、城の大改修を行いました。この際に、中ノ門堀が造られたと考えられています。堀は、現在の市役所付近に当たる西大手門側から本丸方向への敵の進入を阻むために巧みに配された堀のひとつであり、堀と堀の間に中ノ門がかつて存在していました。門は、残されている絵図によると二階建ての立派な櫓門であったようです。

しかしながら、明治時代以降になると城内の建物が取り壊されたり、堀の埋め立てが行われ、城は、かつての姿から大きく変貌していきました。

現在では、旧城内城の宅地化が進み、かつての城の名残を留めるものは本丸御殿の一部のほかは、ほとんどなくなってしまいました。そのようななかで、中ノ門堀は、城の堀跡としては唯一現在まで残されていました。そのような貴重な遺構を保存し、市民の憩いの場として、また観光に活用していくために平成 20 年度から 21 年度にかけて整備工事を行いました。

整備された施設は、堀跡本体と説明板やベンチを設けた見学広場からとなります。堀跡は、発掘調査に基づき、構築当初の勾配を復元しています。また、城の雰囲気を出す土塀や冠木門も設置しました。

ぜひ、蔵造りの通りから博物館や本丸御殿へ向かう途中にお寄りください。

## 川越城本丸御殿 ～江戸の北の守り、川越 17 万石をしのぶ～」（県指定文化財）



川越城は、長禄元年(1457年)に、上杉持朝の命により、家臣の太田道真・道灌親子が築いたといわれています。

江戸時代には江戸の北の守りとして重要視され、代々幕府の重臣が城主となっていました。現存する建物は嘉永元年(1848年)に建てられたもので、本丸御殿の一部として玄関・大広間・家老詰所が残り、川越藩 17 万石の風格をしのばせています。

### 【Wikipedia】

山吹伝説道灌が父を尋ねて越生の地に来た。突然のにおか雨に遭い農家で蓑を借りようと立ち寄った。その時、娘が出てきて一輪の山吹の花を差し出した。道灌は、蓑を借りようとしたのに花を出され内心腹立たしかった。後でこの話を家臣にしたところ、それは後拾遺和歌集の「七重八重 花は咲けども山吹の実の一つだに なきぞ悲しき」の兼明親王の歌に掛けて、山間（やまあい）の茅葺きの家であり貧しく蓑（実の）ひとつ持ち合わせがないことを奥ゆかしく答えたのだと教わった。